

# 東海地方の古代瓦塔研究ノオト

● 永井邦仁

東海地方の古代瓦塔を製作技術の観点から考察する。そして代表的なものとして美濃須衛系、猿投窯系、東三河・遠江系を見出した。東海地方においては8世紀前葉に個性的な瓦塔がみられるが、その後8世紀中葉～後葉にかけて各須恵器窯群での一定の技術を共有した量産化が進み、9世紀前葉まで続くものと考えられる。

## 1 はじめに

本稿は、東海地方（三重・岐阜・愛知・静岡県）に分布する奈良～平安時代の瓦塔について、愛知県内出土例を中心に、製作技術の一端からその系統を明らかにしようとするものである。愛知県内では猿投山西南麓古窯跡群（以下、猿投窯）で多数の瓦塔が出土していることからわかるように、須恵器窯で瓦塔が生産されていた。また窯業遺跡以外の寺院・集落遺跡での出土例をみても須恵器窯で生産されたことが明らかなものが多数を占める。したがって愛知県内出土の瓦塔は製作技術系統による分類が可能と予測される。

## 2 東海地方の瓦塔への言及

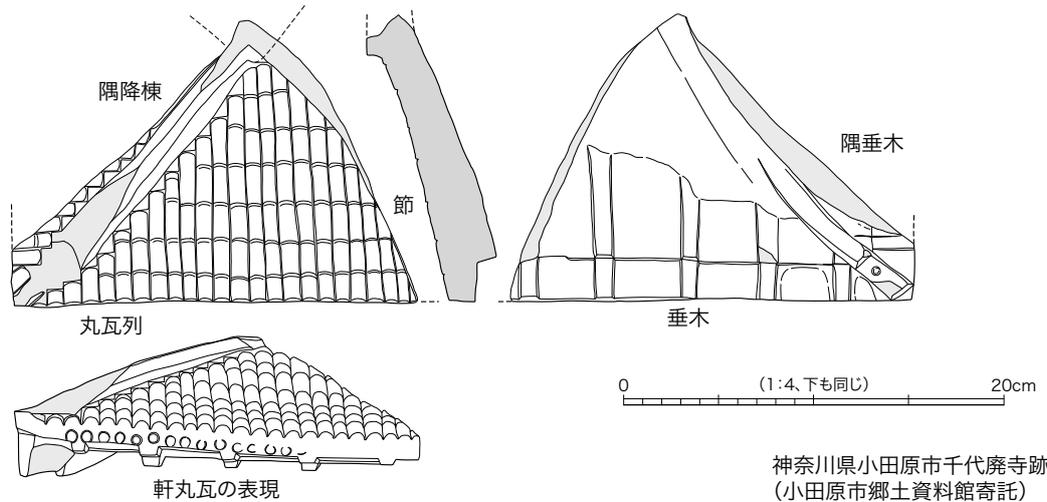
瓦塔の構造を詳細に分析した事例は、稲垣晋也（静岡県三ヶ日町字志遺跡、稲垣 1967）や石村喜英（埼玉県入間郡日高町高岡廃寺跡や坂戸市勝呂廃寺跡、石村 1980・1987）が先駆者であったが、個別紹介という要素が強かった。しかしその後高崎光司は全国的に瓦塔を概観し地域の特徴と斗栱表現の変化から時期設定をした（高崎 1989）。池田敏宏は瓦塔各部のなかで最も特徴的であり確認されやすい屋蓋部に着目しその分類から関東地方と中心とした編年をおこなった（池田 1995 他）。

1990年代になると関東地方以外の各地域で

も瓦塔研究が進んだ。石田成年は関東地方に比べて少数にとどまる近畿地方の瓦塔を概観した。そして屋根瓦表現が丸瓦列のみのAタイプ、丸瓦列と平瓦列からなるBタイプに区分し、Bタイプが東海地方以西の西日本で主体的にみられる点を指摘した（石田 1997、図1参照、以後石田Aタイプ・Bタイプと呼ぶ）。北陸地方では善端直（善端 1994）が、信濃では出河裕之（出河 1995）、吉備では亀田修一（亀田 2002）が集成を行ない、各地域での時期や特徴に言及している。この間池田は関東地方瓦塔の編年と他地域瓦塔を比較し各類型の全国的規模での系譜関係を把握しようとした（池田 1999）。

東海地方の瓦塔研究は、榑崎彰一や本多静雄が猿投窯の報告や写真集のなかで瓦塔の出土を記述したのが始まりで（榑崎 1957・1966、本多 1957 ほか）、以前から特殊品として注目されてはいた。しかし集成がなされたのは梶山勝による尾張国域瓦塔の集成展示（梶山 1985）が初めてで、ただこの時は寺院遺跡に主眼をおいていたため猿投窯の瓦塔は含まれていなかった。筆者が愛知県内で集成をおこなった時はこの集成をベースに猿投窯出土瓦塔を追加した程度であったが（永井 2000）、その後もれていたものを加える一方、豊田市水入遺跡や西尾市古新田遺跡で相次いで瓦塔が出土するなどその数は増加傾向にある。岐阜県内の瓦塔については井川祥子（井川 1995）が集成し、各務原市域を中心とする美濃須衛窯で多くが生産され

石田Aタイプ



石田Bタイプ

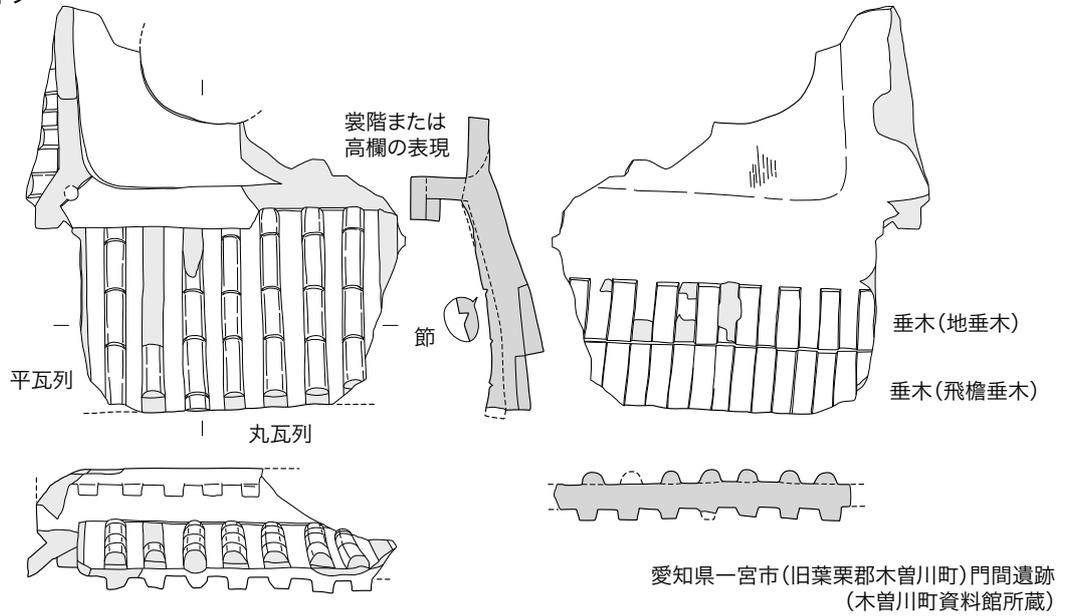


図1 古代瓦塔の屋根瓦表現の二大分類

ていた様相を示した。静岡県内の瓦塔については、馬飼野行雄が島田市竹林寺廃寺跡出土瓦塔の報告（斉藤編 1980）でその全形復元を試み、平野吾郎は県内の出土例を集成した（平野 1992）。

東海地方の瓦塔編年について高崎は、斗栱表現の変化を主軸に1期を勝川遺跡、鳴海 286号窯跡、音楽寺跡、2期を折戸 80号窯跡、3期を宇志遺跡、4期を真福寺東谷遺跡とし、それぞれ8世紀第3四半期、同第4四半期、9世紀前半、同後半という暦年代を想定した（高崎 1989）。それによると斗栱表現は、東京都東村山市下宅部遺跡瓦塔を基準にすると、8世

紀後半以降、持送り（註1）を重視する方向性と手先三斗（註2）を重視する方向性があり、東海地方の瓦塔は後者の系統にあるという。この指摘は重要で本稿もこれを追認するものであるが、残念ながらあまり顧みられていない。

筆者は猿投窯産瓦塔を紹介するなかで、美濃須衛窯産あるいは美濃地域で出土した瓦塔と猿投窯で生産された瓦塔に顕著な相違点がいくつかあることから、東海地方の瓦塔に美濃須衛窯系と猿投窯系の2系統があることを述べた（永井 2005a）。しかしこの時は美濃須衛窯系の特徴ははっきりしたもの、猿投窯系瓦塔については、手先三斗を空中粘土帯で製作する点が

示せたくらいであり十分な検討ができていなかった。

### 3 瓦塔軸部の空中粘土帯

空中粘土帯による斗拱表現とは高崎 1989 の「斗拱粘土帯作り」を受けたものである。高崎は斗拱表現の製作技術について「斗拱粘土帯作り」を提唱した。それには軸部本体（つまり壁面）上方に粘土帯を直接貼付け、切り込みなどを入れて斗の表現をするもの（壁付き粘土帯）と、手先三斗を軸部本体から離して粘土帯を一周させるものがある。高崎が指摘するように関東地方の 9 世紀代瓦塔に多くみられるのは前者であるが、東海地方では折戸 80 号窯瓦塔のように後者が多い。そこで筆者は特に後者について、猿投窯系瓦塔の製作技術系統を考える上で重要な要素であると判断し、上記の用語を設定した。

空中粘土帯によって手先三斗を表現する瓦塔を以下具体的にみていく（図 2）。

#### 勝川遺跡（愛知県春日井市）

軸部本体は粘土紐積み上げ成形である。その下半部に線刻で柱を表わす。その上の壁付き粘土帯に三斗表現がこれも線刻でなされる。軸部本体上端は外反し手先を上からぶら下げる格好になる。したがって完全な空中粘土帯とはならず構成は下宅部遺跡瓦塔に近い。

#### 音楽寺跡（愛知県江南市）

この瓦塔は軸部とその下に位置する屋蓋部を一体で成形している点が異例である。ただ屋蓋部裏面の垂木表現を大幅に省略することを前提とすれば、一旦台の上で屋蓋部を成形開始した後に裏返す必要がなくなる。したがって瓦列表現などに作業を集中しさらに軸部を一体で成形することも可能になる。ある意味効率的な製作技術である。屋蓋部は丸瓦列・平瓦列ともに節が入って一枚ずつが表現される。一方で垂木は丸瓦列に対応せず短く疎らに表現される。軸部下半には立体的な柱と長押の表現があり、上部には持送り表現があって手先三斗の空中粘土帯をのせる。本例には壁付き粘土帯はない。

#### 郷上遺跡（愛知県豊田市）

出土した三斗部分は全て空中粘土帯を篋で欠

き取り輪郭をつくった後、凸形型押ししたものである。軸部本体の出土が少なく不明部分も多いが、壁付き粘土帯はないと考えられる。

#### 水入遺跡（同上）

2 種類の屋蓋部（石田 A・B タイプ）が出土していることから対応する軸部も 2 種類あると思われ注意を要するが、粘土板組み合わせ成形による軸部本体に壁付き粘土帯が認められる例がある。軸部本体には粘土帯を切り込むための目印が線刻される。また持送りののがれた痕があり上方に空中粘土帯が付いていた可能性が考えられる。

#### 中之庄遺跡（三重県一志郡三雲町）

空中粘土帯には目印となる線刻がありそれに揃えて凸形型押しがなされる。屋蓋部は二軒構成で丸瓦列には規則的な節が入る。裏面には木葉痕がみえる。木葉痕は水入遺跡・西尾市古新田遺跡などで確認されている。

#### 折戸 80 号窯（愛知県日進市）

長押に持送りがのり、それに空中粘土帯が貼付く。三斗の凸形くり抜きの下部にある凹線は、斗の立体感を出すものではなくもはや作業用の目印にすぎない。屋蓋部は瓦列に節はなく、降棟の表現も単純である。本例は初層軸部で上層軸部はやや異なる可能性もあるが、壁付き粘土帯はないと考えられる。西春日井群西春日町弥勒寺廃寺瓦塔も実見していないが同じ構成とみられる。

#### 黒笹 8 号窯跡（愛知県三好町）

先に提示した屋蓋部は初層で、軸部は初層以外である（永井 2005a）。初層屋蓋部は反りがなく一軒で、これに対して上層の屋蓋部は大きく反る。軸部には重厚な斗拱表現がある。すなわち突出させた尾垂木の上に斗がのりさらにその上にのる軒桁が空中粘土帯となる。ただしこの空中粘土帯は折戸 80 号窯瓦塔のような篋による直線的な欠き取りをせず目印もない。また三斗の凸形は型を用いずに篋でくり抜く。

#### 市道遺跡（愛知県豊橋市）

長押上方を壁付き粘土帯が一周する。その粘土帯に持送りが取り付けさらにその上で空中粘土帯が一周する。持送りは全て尾垂木が表現される。壁付き粘土帯には大きな凸形と小さな凸形の 2 種類のくり抜きがあってこれで三斗が

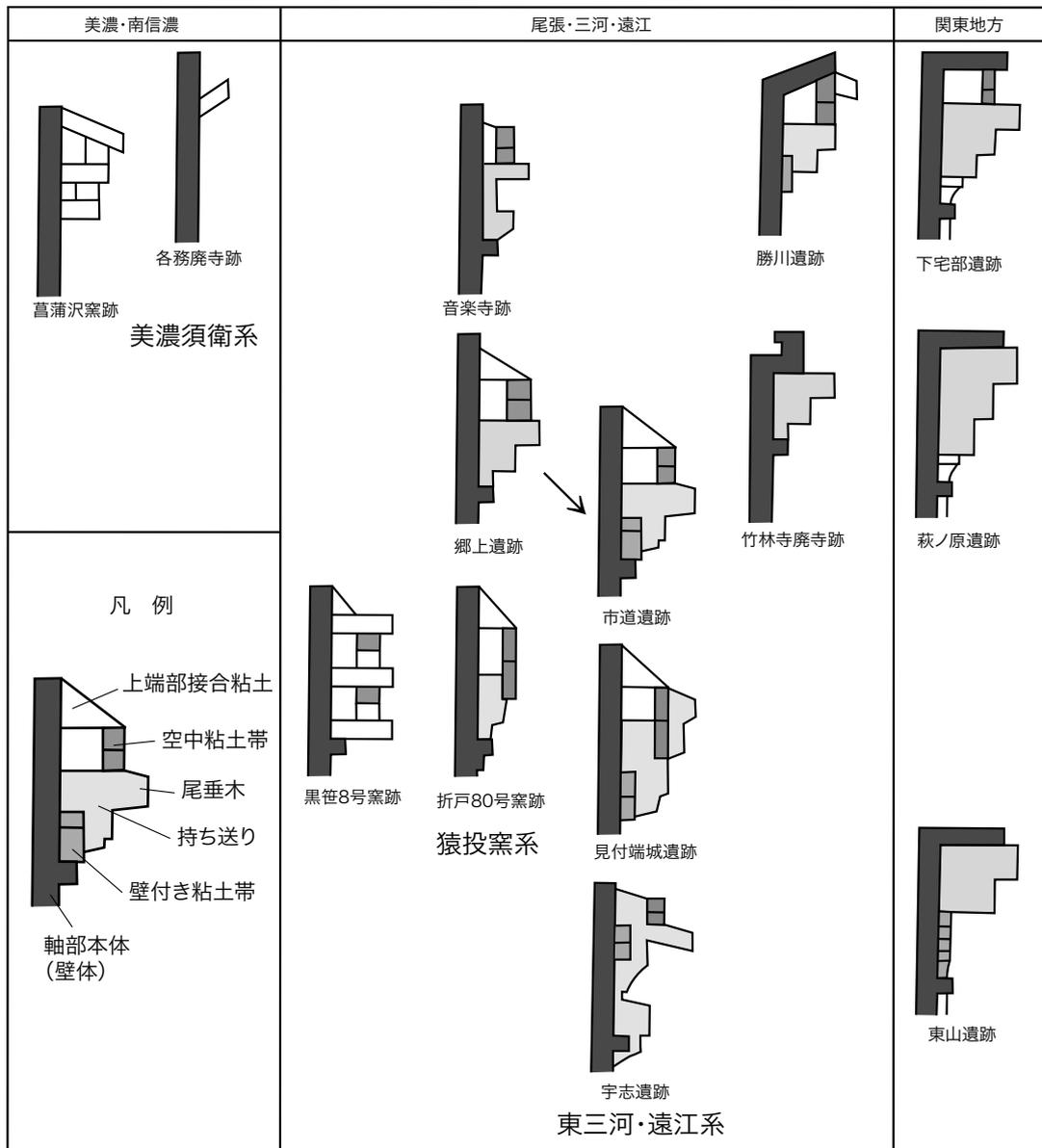


図2 古代瓦塔の斗栱表現の変遷 (高崎 1989 をもとに作成)

表わされる。小さな凸形は型押しで、初層軸部ではその上端を凹線で揃える。ここでも線刻は作業用の目印である。

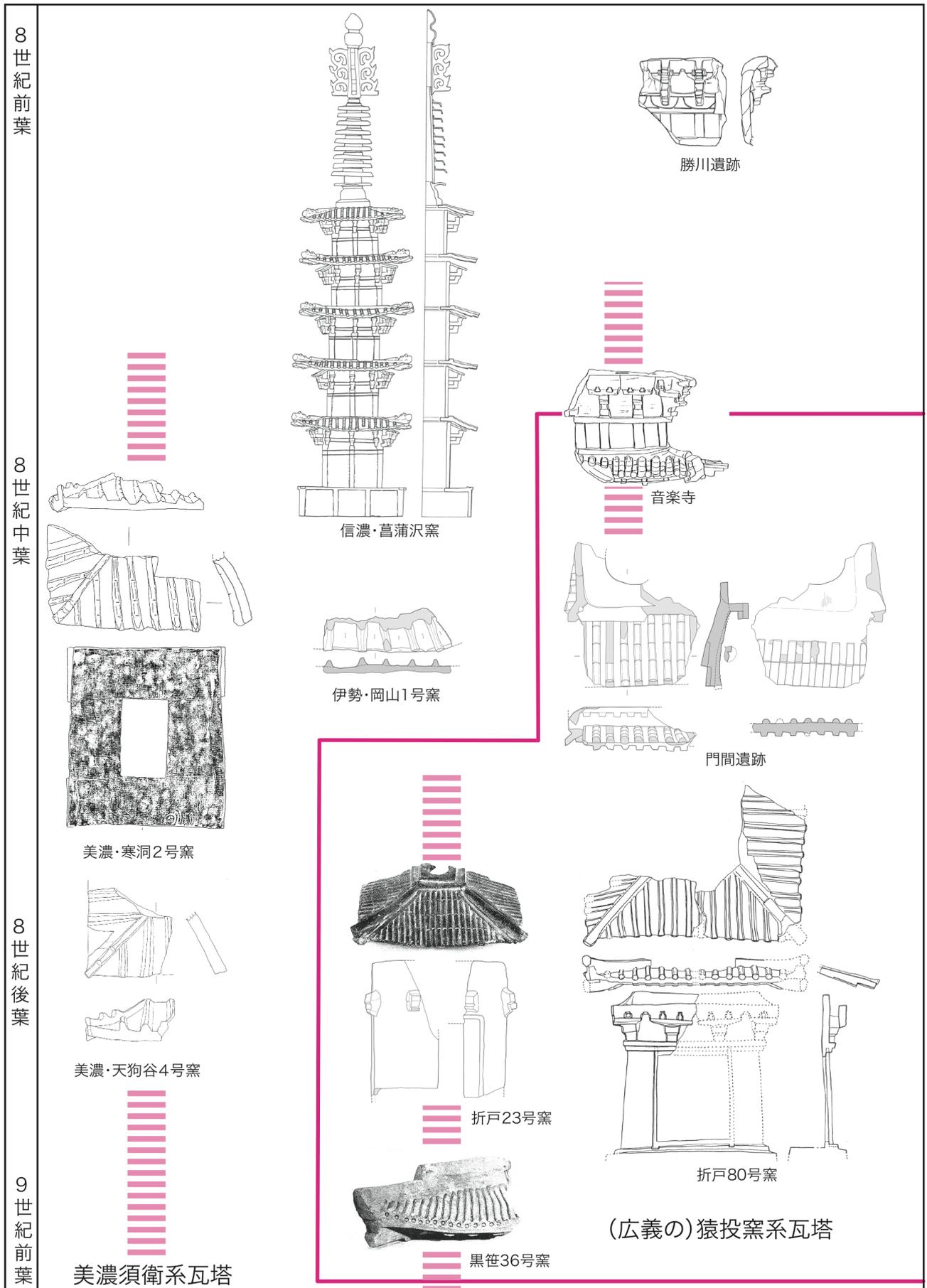
### 遠江の瓦塔

市道遺跡瓦塔と同じ斗栱表現が遠江国域にある。見附端城遺跡出土瓦塔(静岡県磐田市)は軸部上端隅部であるが壁付き粘土帯と空中粘土帯の組み合わせである。三斗の凸形は型押しで市道遺跡瓦塔のような大きな凸形くり抜きはない。尾垂木は隅にあるだけで瓦塔どうしの比較では省略が進んだといえるが逆により実物の木造多層塔には近づいたといえる。また宇志遺跡

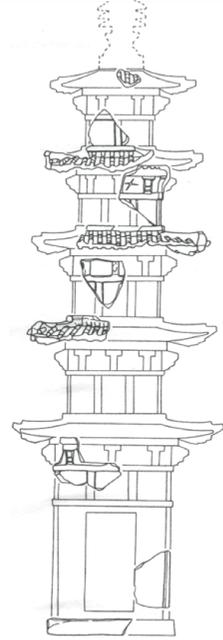
出土瓦塔(静岡県引佐郡三ヶ日町)は全形が復元された著名な瓦塔であるが、これも同じ組み合わせである。凸形は型押しで全ての持送りで尾垂木が表現される。屋蓋部は反りが大きく丸瓦列は3~5cmごとに節が入る。隅降棟は折戸80号窯瓦塔同様単純なつくりで、この点市道遺跡瓦塔の方が実物に近い。

以上主だった斗栱表現をみたが、大別して(1)折戸80号窯瓦塔のような1段の空中粘土帯のみのタイプ、(2)市道遺跡瓦塔のような壁付き粘土帯+空中粘土帯のタイプ、(3)そのいずれにも該当しないタイプがある。(1)

図3 東海地方古代瓦塔の系統およびその変遷

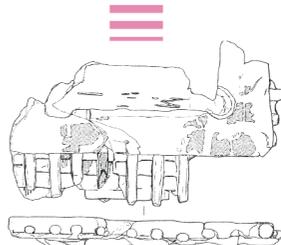


8世紀前葉



遠江・竹林寺廃寺

8世紀中葉

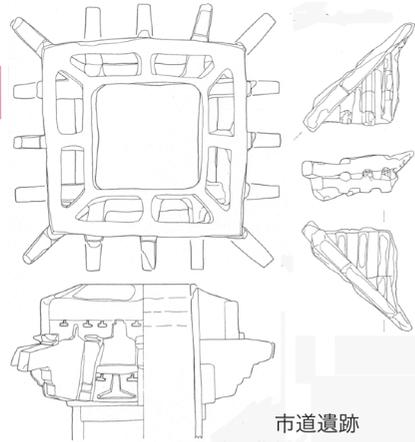


山城・瀬後谷4号窯

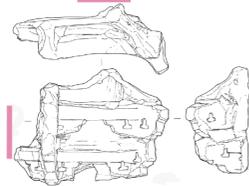


鳴海286号窯

8世紀後葉

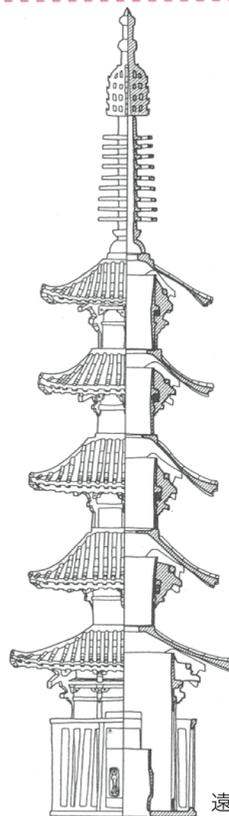


市道遺跡



遠江・見付端城遺跡

9世紀前葉

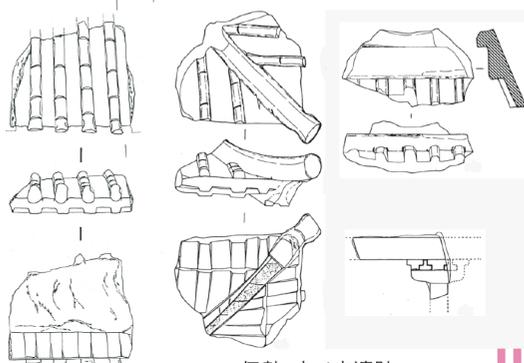


遠江・宇志遺跡

東三河・遠江系瓦塔

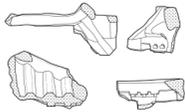
図版出典

- |         |                   |
|---------|-------------------|
| 寒洞2号窯   | 渡辺1996            |
| 天狗谷4号窯  | 渡辺1998            |
| 高蒲沢窯    | 鳥羽1991            |
| 岡山1号窯   | 筆者実測              |
| 折戸23号窯  | 五島美術館1965・永井2005a |
| 黒笹36号窯  | 五島美術館1965         |
| 勝川遺跡    | 松原1992            |
| 音楽寺     | 宮川1995            |
| 門間遺跡    | 筆者実測              |
| 折戸80号窯  | 高崎1989            |
| 神沢古窯    | 三渡1976            |
| 中ノ庄遺跡   | 谷本1972            |
| 郷上遺跡    | 酒井2001            |
| 水入遺跡    | 永井2005b           |
| 黒笹8号窯   | 永井2005a           |
| 瀬後谷4号窯  | 石井1992            |
| 鳴海286号窯 | 高崎1989            |
| 竹林寺廃寺   | 平野1992            |
| 市道遺跡    | 費1996             |
| 見付端城遺跡  | 磐田市埋蔵文化財センター1993  |
| 宇志遺跡    | 平野1992            |

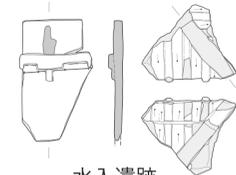


神沢古窯  
(鳴海220号窯)

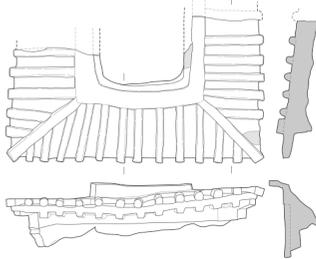
伊勢・中ノ庄遺跡



郷上遺跡



水入遺跡



黒笹8号窯

と(2)は共に窠による鋭角的な切り込み、三斗の凸形型押しによる表現、それら作業のための目印となる線刻がある。また持送りなどの各部品は規格化が進む。これら特徴は(微細表現の違いは別として)瓦塔を量産するために導入された技術といえよう。

(1)と(2)の差異はその分布域にある。先述したように(2)のタイプは遠江から東三河地域にかけて分布する。これは須恵器窯の分布域とも関わってこよう。すなわち(2)の分布域は二川・湖西窯産須恵器が主体を占める地域でもある。このことから(2)を二川・湖西窯産瓦塔の特徴とみなすこともできよう。ただし同古窯跡群では瓦塔の出土は知られていないので、現状では東三河・遠江系瓦塔としておきたい。これらは空中粘土帯を採用している点からみても猿投窯系瓦塔の影響下にあることは明らかで、同時期かやや後出する時期と考えられる。

(3)には勝川遺跡瓦塔、黒笹8号窯瓦塔が該当する。前者は空中粘土帯が採用されておらず、また持送りと壁付き粘土帯(ただし切り込みはない)が埼玉県東山遺跡瓦塔のように分化していない状態にある。したがって空中粘土帯以前あるいは持送りの大型化以前ということになる。後者は空中粘土帯を採用しているもののそれが2段であり、また各部品の規格統一はなされておらず粘土紐を縫ぎ合わせたような構成となっている。すなわち(1)のような製作技術が導入された形跡がない。

#### 4 猿投窯における異系統瓦塔

前項で概観した斗拱表現に空中粘土帯を採用した瓦塔は、いずれも屋蓋部が石田Bタイプであった。ところが猿投窯では、石田Bタイプであってもあきらかに異系統と考えられる瓦塔や石田Aタイプ瓦塔も生産されていた。前者が鳴海286号窯、後者が黒笹31号窯、同36号窯、折戸23号窯の各瓦塔である。次にこれら瓦塔について概観する。

##### 鳴海286号窯(愛知県名古屋市)

鳴海32号窯式の須恵器を焼成した窯である。瓦塔は屋蓋部のみが出土し、丸瓦列は棒状粘土で節がなく平瓦列には段を入れて一枚々々を表

現ししかも写実的な高欄を表現している。瓦表現・高欄表現は共に猿投窯の他の瓦塔ではみられないもので、京都府瀬後谷4号窯跡(灰原)出土瓦塔に類例を求めることができる。したがって瀬後谷4号窯瓦塔の製作工人との直接的な関わりを考えたくもなる。ただ瀬後谷4号窯瓦塔は緑釉がかかるが、鳴海286号窯瓦塔は無釉であり緑釉陶器を併焼した痕跡もない。

##### 黒笹31号窯(愛知県西加茂郡三好町)・折戸23号窯(愛知県日進市)

黒笹31号窯は折戸10号窯式の須恵器を焼成した窯である。丸瓦列に節が入り、類例は豊田市舞木廃寺跡出土瓦塔がある。軒先の状況や軸部については不明である。折戸23号窯も折戸10号窯式とみられる。屋蓋部は黒笹31号窯瓦塔に類似し、軒先には竹管状工具によって軒丸瓦を表現する。初層軸部の斗拱表現は粘土塊を窠で切り出した持送りのみである。手先三斗を別に成形した可能性も残されるが、いずれにせよ空中粘土帯の技術とは大きくかけ離れたものである。

##### 黒笹36号窯(愛知県西加茂郡三好町)

軸部は不明で屋蓋部が知られている(本多1957)。黒笹31号窯・折戸23号窯瓦塔からさらに省略が進んだ形状で、丸瓦列に節はなく、降棟は角柱状粘土の貼付けである。垂木は軒先に対して斜めに入る。

猿投窯産石田Aタイプ瓦塔はほとんどが軸部不明であるため、例えば折戸23号窯瓦塔が黒笹8号窯瓦塔のように技術系統から外れたものかどうか、現状では結論が出せない。また東海地域における石田Aタイプ瓦塔の折戸10号窯式以前の状況も明らかでない。屋蓋部表現だけが異なるのか、それとも斗拱表現までを含めて異系統の瓦塔が存在するのか、今後の課題としたい。

#### 5 技術系統からみた東海地方の瓦塔

したがって現状では猿投窯系瓦塔を、空中粘土帯を中心にいくつかの製作技術系統を包括したものとして考えておきたい。そして明らかにした範囲で製作技術系統ごとの展開を提示す

る(図3)。

8世紀中葉前半とみられる信濃菖蒲沢窯は美濃須衛系須恵器工人の関与が想定されている(鳥羽1991)。しかし美濃須衛系瓦塔最大の特徴である垂木表現の省略はなく、瓦塔に関していえば製作技術が直接移植されたものではない。関わりがあったとしても別にモデルとなる木造多層塔ないしは瓦塔があったと思われる。8世紀中葉に開始された美濃須衛系瓦塔は猿投窯産瓦塔と併行して作られ続けるが(註3)、製作技術や製品そのものがあまり広範に広がらなかったとみられる。

それに対して猿投窯系瓦塔は、丸瓦のみに節を入れ簷で規則的に削りだした垂木をもつ石田Bタイプ屋蓋部が鳴海32号窯式段階(8世紀中葉)にみられる点が成立の画期となろう。神沢古窯(鳴海220号窯)瓦塔を窯式基準とし、一宮市門間遺跡・西尾市古新田遺跡・中之庄遺跡が挙げられる。中之庄遺跡瓦塔では空中粘土帯が採用されており、本例が猿投窯産かどうかは不明(註4)ながらこの時点で製作技術が完成されたことを示している。

そして丸瓦列の節を省略した屋蓋部が折戸10号窯式(8世紀後葉～9世紀初頭)に登場する。なかでも郷上遺跡瓦塔は持送りに空中粘土帯をのせるようにして接合しており、その他表現の省略程度から折戸80号窯瓦塔のような持送りに粘土帯を貼付けるものより先行すると考えられる。これは東三河・遠江系瓦塔でもみられる変化(市道遺跡→見付端城遺跡)で、製作にあたって猿投窯系瓦塔を常に参考にしてい

たことが考えられる。しかし丸瓦列に節を入れ続ける点は独自色のあらわれといえよう。

猿投窯産石田Aタイプ瓦塔は8世紀後葉に登場し、節や隅降棟に省略が進んだ黒笹36号窯瓦塔はやや後に位置付けられる。なお、折戸23号窯瓦塔・黒笹36号窯瓦塔ともに竹管状工具による軒丸瓦表現があり、尾張地域以外ではほとんど例がない点に注意しておきたい(註5)。

勝川遺跡瓦塔や竹林寺廃寺瓦塔などこれら系統から外れる瓦塔は位置付けが難しいが、勝川遺跡瓦塔は先述のように猿投窯系瓦塔に先行する時期と考えることができる。また音楽寺瓦塔も製作技術が定型化する以前の時期とみてよいと思われる。黒笹8号窯は定型化した屋蓋部に対し「我流」な斗栱表現というアンバランスさが目立つ。軸部だけが伝習不能であった可能性もあるが、屋蓋部と軸部で工人が異なることも考えられよう。ここでは屋蓋部表現から折戸10号窯式に含めて考えておきたい。

## 6 さいごに

調査にあたっては、池田敏宏、内山伸也、清水政宏、岡 潔、服部哲也、森 泰通、矢頭俊和、小田原市郷土資料館、木曾川町歴史資料館、甚目寺町教育委員会、豊田市民芸館、名古屋市見晴台考古資料館、四日市市教育委員会の各氏・各機関に御協力いただいた。御協力・御教示いただいた方々には未だ十分な成果が出せないでいることをお詫びしたい。

### 註

- 1) 持送りは、肘木や尾垂木が壁体から前方へ階段状に迫り出す部分をいう。転じてこれをシルエット的に表現する板状粘土のことを示す。
- 2) 屋蓋を支える組物の先端部分を手先という。軒桁を3つの斗で直接支持することからこのようによぶ。
- 3) 瓦塔出土の美濃須衛窯は、太田1号窯址群内3号窯跡(美濃須衛編年IV-2期:8世紀中葉)、天狗谷4号窯跡(同IV-3期:8世紀後葉)、寒洞2号窯跡(同IV-3～V-1期:8世紀後葉～9世紀前葉)である。
- 4) 伊勢国域は東海地方でも瓦塔が少ない。本例以外では四日市市岡山1号窯跡、伊勢国分寺跡くらいで、在地窯で量産されていた可能性は低い。
- 5) 尾張国域では甚目寺町清林寺遺跡瓦塔に同様の表現がある(永井2005a)。他地域では神奈川県小田原市千代廃寺瓦塔(図1下)のみである。

### 参考文献

- 井川祥子 1995 「岐阜県内出土の瓦塔」『博物館だより』No.29 岐阜市歴史博物館。
- 池田敏宏 1995 「瓦塔威屋蓋部表現手法の検討」『土曜考古』19号 土曜考古学会。
- 池田敏宏 2000 「関東地方瓦塔と他地域の比較」『研究紀要』11 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- 石井清司 1992 「3. 木津地区所在遺跡」『京都府遺跡調査概報』第51冊 京都府埋蔵文化財調査センター。
- 石田成年 1997 「摂河泉の瓦塔」『河内古文化研究論集』和泉書院。

- 石村喜英 1980 「武蔵高岡廃寺跡と出土の瓦塔」『埼玉史談』27-3。
- 石村喜英 1987 「武蔵勝呂廃寺の創建と瓦塔」『埼玉の考古学』人物往来社。
- 稲垣晋也 1967 「静岡県引佐郡三ヶ日町志山中発見の瓦塔」『考古学雑誌』第53巻第1号 日本考古学会。
- 磐田市埋蔵文化財センター編 1993 『見付端城遺跡発掘調査報告書』磐田市教育委員会。
- 亀田修一 2002 「吉備の瓦塔」『環瀬戸内海の考古学 平井勝氏追悼論文集』下巻 古代吉備研究会。
- 梶山 勝 1985 『尾張の古代寺院と瓦』名古屋市博物館。
- 小嶋廣也編 2001 『古新田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 五島美術館 1965 『猿投出土陶・三彩と緑釉陶』。
- 齊藤 忠編 1980 『竹林寺廃寺跡』島田市教育委員会。
- 三渡俊一郎 1976 『緑区の考古遺跡』名古屋市教育委員会。
- 酒井俊彦編 2001 『郷上遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 善端 直 1994 「北陸地方の瓦塔」『文化財学論集』文化財学論集刊行会。
- 高崎光司 1989 「瓦塔小考」『考古学雑誌』74-1。
- 谷本鋭次編 1972 『中ノ庄遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会。
- 出河裕之 1995 「信濃の瓦塔再考」『信濃』47-4。
- 鳥羽嘉彦編 1991 『菖蒲沢窯跡』塩尻市教育委員会。
- 永井邦仁 2000 「古代の瓦塔」『まいぶん愛知』No.61 愛知県埋蔵文化財センター。
- 永井邦仁 2005a 「東海地方の古代瓦塔に関する覚書」『三河考古』第18号三河考古刊行会。
- 永井邦仁編 2005b 『水入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 名古屋市教育委員会 1996 『鳴海 286 号窯跡発掘調査報告書』名古屋市教育委員会。
- 植崎彰一 1957 『愛知県猿投山西南麓古窯跡群』愛知県教育委員会。
- 植崎彰一 1966 『陶磁全集 31 猿投窯』平凡社。
- 贊 元洋編 1996 『市道遺跡 (II)』豊橋市教育委員会・牟呂地区遺跡調査会。
- 平野吾郎 1992 「瓦塔」『静岡県史』資料編考古 4 (古代)。
- 本多静雄 1957 『愛知県猿投山西南麓古窯址群』社団法人日本陶磁協会。
- 松原隆治 1992 『勝川遺跡Ⅲ』愛知県埋蔵文化財センター。
- 宮川芳照編 1996 『音楽寺遺跡発掘調査報告書』江南市教育委員会。
- 渡辺博人編 1996 『各務寒洞窯址群発掘調査報告書』各務原市埋蔵文化財センター。
- 渡辺博人編 1998 『須衛天狗谷古墳群・天狗谷窯址群発掘調査報告書』各務原市埋蔵文化財センター。